

パーシュパタ派の灰をめぐる*

高島 淳

先日 “Mapping Medieval Śaiva Centers with non-Indic Materials” (2022年8月6日～2022年8月7日) と題された Workshop における張本研吾氏の発表のおかげで、私が気づいていなかった中国文献(『宋雲行紀』)に注意を向けることができた。氏に感謝した上で、昨年11月1日に逝去された我が師である原實先生への追悼の意味での一つの文献解釈を提示したい。

原先生は1968年の「灰」と題された論文の結論部分で、

「尚、世人の軽蔑・非難を招くための灰使用である以上、その灰が agnihotra 等による聖灰である必要はなく、むしろ世人の忌み嫌う穢わしき屍の灰 (citā-bhasma) の類が原初のものであったであろうことも、これによって必然的に結論され得るであろう。」(『灰』 p.388(63))
「されば彼らの用いる灰はヴェーダの聖灰 (agni-hotra) に非ず、却つて世人の忌み嫌う、屍を焼いた不吉の灰たるべく、Śiva 教的文脈と調和し Śiva の Epithet, citābhasmapriya と符合をみるに到る。」(p.385(66))

とパーシュパタ派の灰の本来の姿が屍の灰 (citā-bhasma, śava-bhasma) であったことを主張している。しかしながら、2003年にその縮約英文版 (an abridged English version)^{*1}として出版されたものにおいては、これについての記述がほぼ省略されている。

この間の事情については何もうかがっていないが、一つの理由としてパーシュパタ派が実際に屍の灰を使用していたことの例証などが発見できなかったことがあると考えられる。今回気づかされた『宋雲行紀』の記述はパーシュパタ派が尸林 (śmaśāna) の灰を使用していた実例と考えられることを論じていきたい。

注目したいのは『宋雲行紀』の烏場国 (Udyāna) についてのくだりである。

「泉水北有寺。恒以驢數頭運糧上山。無人驅逐自然往還。寅發午至。每及沖浪。此是護塔神渥婆僊使之然。此寺昔日有沙彌。常除灰目入神定。維那輓之。不覺皮連骨離。渥婆僊代沙彌除灰處。國王與渥婆僊立廟圖。其形像以金傳之。」(SAT テキスト)

「太子が飲んだ泉水の北にも寺があり、〔その寺へは〕つねにロバ数頭が食糧を運んで山に登るが、追い立てる人がついていないのに、自然に行って帰ってくる。寅の刻に発して午の刻につき、つねに中食に間にあう。これは塔を護る神、シヴァ神が、そうさせているのである。この寺にむかしある沙弥がいて、いつも灰を除いていた。この沙弥が禅定に入った時、維那

* 本稿は、京都大学人文科学研究所課題公募班 (一般A班) 「インドにおける『循環的存在論』の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に」第4回研究会 (日時: 2022年9月30日 (金) 14:00～17:30、場所: 京都大学人文科学研究所・セミナー室1およびオンライン) において高島がオンラインで発表した際のレジュメである。この発表の録画を切り出したものをこの[Youtubeへのリンク](#)に置いておく。

^{*1} “Ashes”, *Cracow Indological Studies, Vols. IV-V; 2nd International Conference on Indian Studies Proceedings*, (Krakow 2003), pp. 251-267.

が遺骸をひき、思いがけず皮もろとも骨まで離れてしまった。そこでシヴァ神が沙弥にかわって灰掃除をしたが、そこに国王はシヴァ神のために廟を立て、その形像を描き、金箔をこれにつけた。」(長沢和俊訳 p.192)

「太子が飲んだ泉水の北にも寺があり、いつも驢馬数頭に食料を山の上に運ばせたが、追い立てる人は随っていないのに、ひとりで往復した。寅の刻に出発して午の刻に到着し、いつも中食の時刻に間に合った。これは塔の護り神の湿婆倦がそうさせたのである。昔、この寺に沙弥がいて、いつも灰の掃除をしていたが、彼が禪定に入った時に、維那(寺務を総轄する役僧)が彼を引っぱったところ、思いがけず皮もろとも骨まで離れてしまったので、湿婆倦が沙弥に代わって灰掃除をしたが、そこに国王は湿婆倦のために廟を建て、その姿を絵にして金箔を貼っている。」(入矢義高訳 p.223)

原文が簡潔であるので、話の構造を分節してみることにする。

1. 寺に驢馬が追い手なしに食料を運ぶ奇跡がある
2. その原因はシヴァが守護神としてあるから^{*2}
3. その原因は寺の沙弥の行いに感じて王がシヴァの廟を寄進したこと
4. 寺の沙弥の行いとは「灰を捨てること」^{*3}
5. 禪定中の沙弥は誤って役僧によって死んだ(皮をひっぱったら骨まで抜けた)
6. 沙弥が死んだ後も「灰を捨てること」はシヴァによって続けられた
7. それに感じた王がシヴァの廟を建てた
8. シヴァの像は金箔

寺に起こっている奇跡の説明であるので、無理やりのこじつけがあるとすると、「沙弥」というのは寺とシヴァの廟を関係づけるための理由づけで、(シヴァの)行者(沙門)の話であったとする方が自然である。すると、ある行者が「灰を捨てること」と禪定を行っていたが、誤って死体と同様の扱いを受けて死んだが、その死後もシヴァが「灰を捨てること」を続けたので、神的な現象と思った王がシヴァの廟を建てた、というのがここに語られている逸話の本質的な要素であると思われる。「灰を捨てること」に対して王が感謝の意を示すということは、公共の場所にかかわっていることであるから、これは尸林(śmaśāna)の灰の処分についてのお話と考える以外に納得のいく説明があるとは思われない。

つまり、これはパーシュパタ派の行者が、パーシュパタ派の行法のために尸林において灰を集めるということを行っていた。同時に「灰において寝すべし」のような形で尸林の灰の中での瞑想などの最中に誤って死体として扱われて行者が死ぬという事件が起こった。しかしその後でも目に見える人の姿なしに灰の整理が続いたので、シヴァ神の奇跡ということになって王はシヴァ神の廟を建てて、金箔で姿を描いた像(mukha-liṅga?)を設置した。という物語ではないだろうか。

^{*2} 「護塔神」とある塔が前に出てくるアショーカ王の塔とするとスダーナ太子の仏蹟としてのこの山(善特山)全体に対して守護神であったという意味か?

^{*3} 長沢は注で「灰を除くは灰を塗るの誤りかもしれない」と塗灰の徒に言及するが、6でシヴァが継続することに繋がらないので「捨てる」という読みは捨てられない。

この解釈はやや恣意的と思われるかもしれないが、その後の玄奘の記述と比較すると、この解釈を支持する要素が見えてくる。

まず第一に、『宋雲行記』において上記のことの起こる山は「善特山」と呼ばれていたが、対応する山を玄奘は、弾多落迦山 (daṇḍaloka) としている。「刑罰処の意」と水谷の註釈にもあるが、当然のこととして刑罰には処刑がともない、尸林がその近くにあることは当然と考えられる。

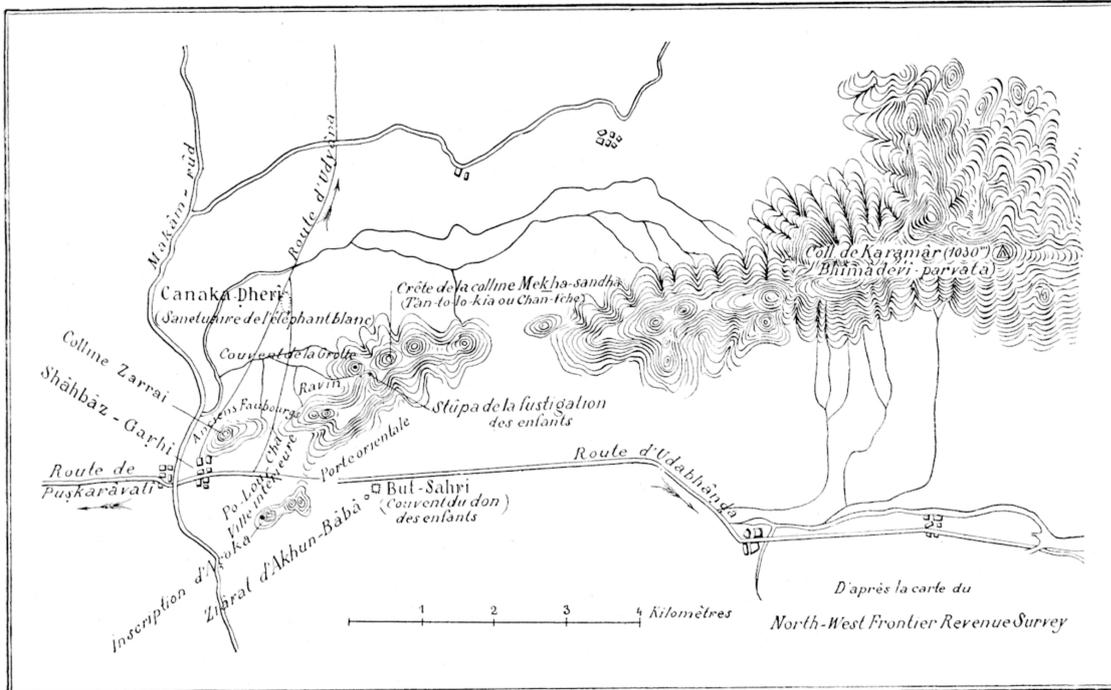
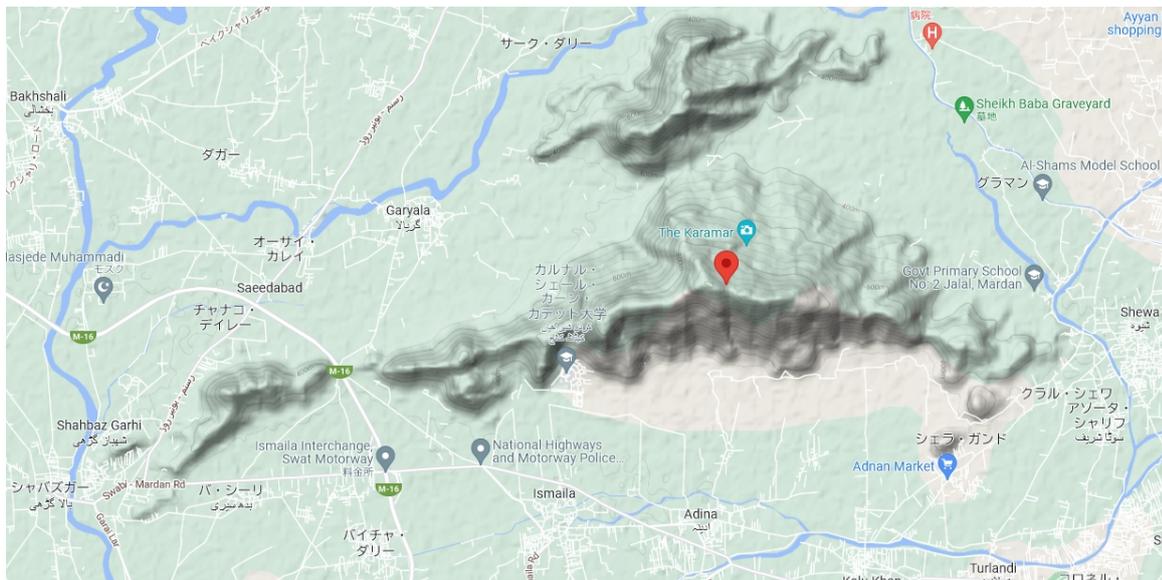


FIG. 64. — PO-LOU-CHIA.

Foucher による弾多落迦山周辺の地図



上記地域の現在の google 地形図

続いて、『西域記』 2.4.17 は次のように述べている。

「毘摩天女像—跋虜沙城から東北へ五十余里で高い山に至る。山には青石の大自在天婦像がある。毗摩天女である。土地の話によればこの [自在] 天 [婦] 像は自然のものだとのことである。靈験も多く、祈禱する人も衆い。印度の諸国から福を求めて願をかけ、貴賤ともに多く来たり遠近を問わずみな集まってくる。天神の姿を見たとまつろうと願うものが、心をこめて一心に絶食すること七日すれば、或いは見たてまつることがある。願をかけるものは多く聴きとどけられる。山の下には大自在天祠があり、塗灰外道がおまつりをしている。」

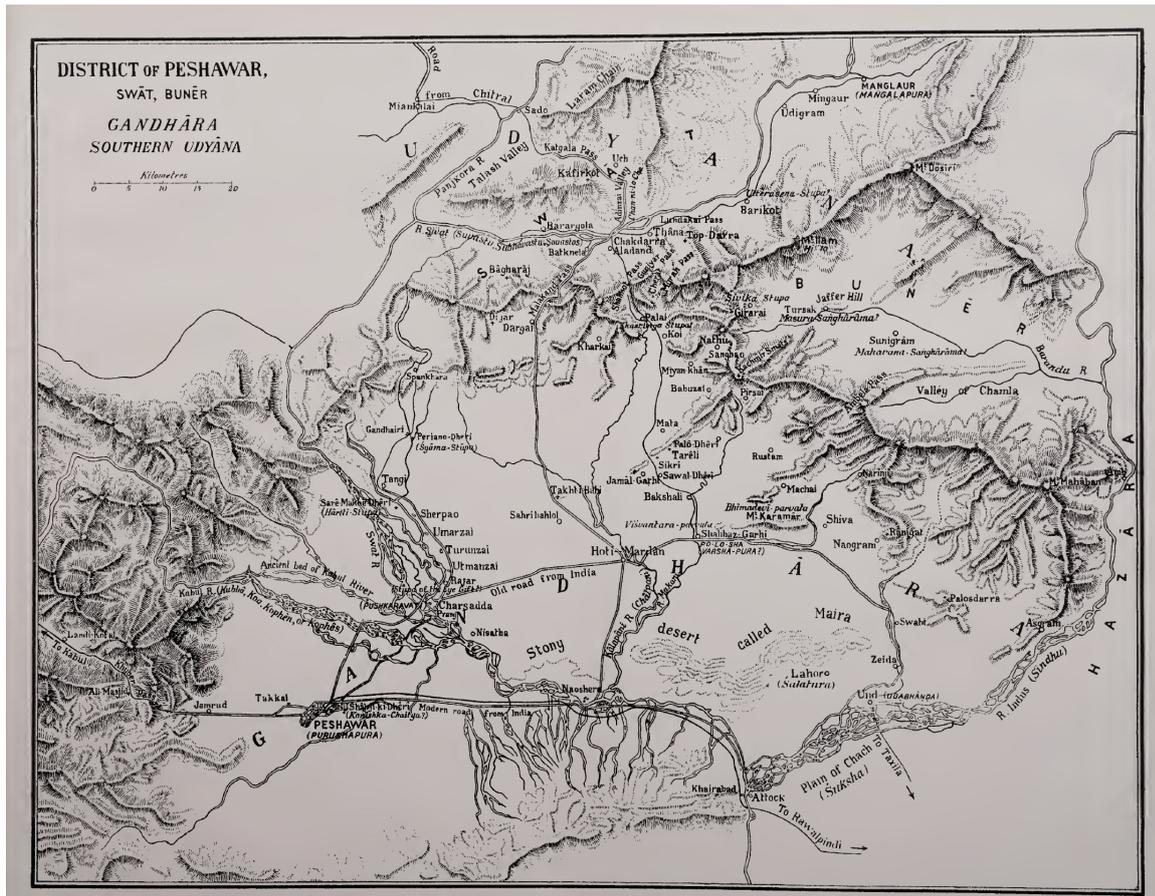
「跋虜沙城より東北へ二十余里で弾多落迦山」と述べられていたことから、「跋虜沙城から東北へ五十余里」というこの山は現在 Karamar 山と呼ばれている一連の山のつらなりの一部であると推定できる。すると『宋雲行紀』の上記の記述の次に述べられている婆姪(姪)寺(〔この〕山嶺をへだてて婆姪寺があり、夜叉の造った寺である。)というものと「西域記」の大自在天婦像が同一のものではないかと考えられる。「婆姪」はたとえば *śivakanyā* の音訳であるか、「姪」に夫人の意味をとってシヴァの妻を意味するという可能性も考えられる。「山の下には大自在天祠があり、塗灰外道がおまつりをしている。」という「西域記」が記述しているものが『宋雲行紀』の「湿婆倦の廟」とが実質的に同一のものであることは十分に考えられる。Foucher は、この「山の下」について Karamar 山へ登る道は東西の稜線ルートしかなく、東側に Shiva(Shewa) という村があるのでそこではないかと推理しているが、宋雲の記述との対応を考えると西側の登山口にあったと仮定すると、弾多落迦山の東側の登り口でもあったことになって整合的な解釈が可能である。

「山嶺を隔てて、婆姪寺がある。夜叉が建てたもので、僧徒は八十人いた。羅漢と夜叉がいつも供養に来て、清掃したり薪を運んできたりするとのことで、〔その時は〕俗人も比丘も寺にいてはならない定めであった。」(入矢義高訳 p.223-4)

「夜叉が建てたもの」「自然のものだとのことである」と人間ならざる建築という点でも共通した記述である。

入矢義高はその訳註において、「59) 皮もろともに骨まで離れてしまった あらゆる感覚のはたらきを断滅して、身心脱落しきった禅定の三昧境をいう。それがこのように外見上は死人同然に肉体の剥離として現われるところまで徹底していたことをいうのである。『観仏三昧海経』巻一には、滅意三昧に入った菩薩が、地而から生え延びてきた草がその肉体を突きぬけて肘のところまで達しても、そのことを知らずにいたという話が載っている。」という解釈をしているが、「死人同然」という点が重要であって、未熟な沙弥に高度な三昧の境地を期待するより、単に尸林の灰の中で修行していたと想定するのがこの逸話の解釈として自然であると思われる。

これらの点を総合的に解釈して、この逸話の原型としては、パーシュパタ派の行者が尸林の灰を修行のために集めていた、という事例を十分に想定できると思われる。そしてその行者の死後に王が建てたパーシュパタ派に属するシヴァ寺院として、玄奘の言及する毘摩天女の山のふもとの寺院を想定することは可能であると思われる。



ガンダーラの地図

参考文献

- Beal, Samuel. *Travels of Fah-Hian and Sung-Yun : Buddhist pilgrims from China to India (400 A.D. and 518 A.D.)* Trübner, 1869.
- Chavannes, Édouard. “Voyage de Song Yun dans l’Udyāna et le Gandhāra”. In: *Bulletin de l’École française d’Extrême-Orient* 3.3 (1903), pp. 379–441. DOI: [10.3406/befeo.1903.1235](https://doi.org/10.3406/befeo.1903.1235).
- Foucher, A. “Notes sur la géographie ancienne du Gandhāra (Commentaire à un chapitre de Hiuen-Tsang)”. In: *Bulletin de l’École française d’Extrême-Orient* 1.4 (1901), pp. 322–369. DOI: [10.3406/befeo.1901.1060](https://doi.org/10.3406/befeo.1901.1060).
- Foucher, Alfred and Harold Hargreaves. *Notes on the ancient geography of Gandhara : a commentary on a chapter of Hiuan Tsang*. Superintendent Government Printing, 1915.
- 原實「灰」『東京大学文学部研究報告: 哲学論文集』3(1968), pp. 384–450.
- Hara, Minoru. “Ashes”. In: *2nd International Conference on Indian Studies Proceedings*. Cracow Indological Studies IV-V. Kraków : Księgarnia Akademicka, 2003, pp. 251–267.
- 楊銜之, 入矢義高『洛陽伽藍記』, 東洋文庫 517, 平凡社, 1990.
- 玄奘, 水谷真成『大唐西域記: 玄奘三蔵の旅』, 平凡社, 1983.

法顯，楊銜之，長沢和俊『法顯伝・宋雲行紀』，東洋文庫 194，平凡社，1971.